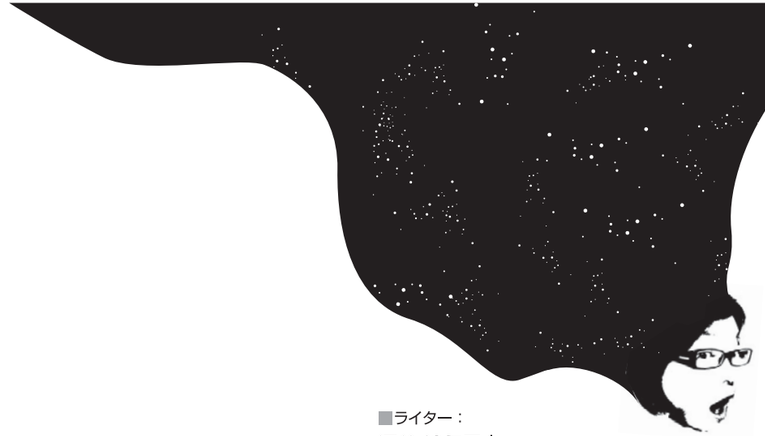
まちのミカタ

Litaracy



Theme

テーマ：「偉大なる凡人たち」

■ライター：
深谷 紗与子 | SAYOKO FUKAYA
NPO法人岡崎まち育てセンター・りた　事務局

日本で「宇宙開発」というと、私はJAXA（宇宙航空研究開発機構）を真っ先に思い浮かべる。そんな途方もないことを民間で志している人がいるなんて、想像すらしたことがなかった。

しかし、民間宇宙開発の草分け的な存在「CAMUIロケット（※2001年、北海道大学大学院と北海道の企業植松電機が協働で開発）」の打上げが成功して以来、日本でも民間主体の宇宙開発のムーブメントがじわじわと拡大してきているらしく、ここ三河にも民間それも「市民活動」として宇宙開発に挑んでいる人たちがいることを、私は最近になって知った。

そのメンバーは主に三河在住のどこにでもいそうな普通のおじさん、おねえさん、学生さんたちで、取り立てて東大卒だとか、JAXAに縁がある人たちというわけではない。そんな彼らが「空とロケット団（※NPO法人認証申請中）」という団体を組織して、市民活動としては初めての1,000メートル級ロケットの打ち上げに挑んでいる。それもホームセンターで手に入るような部品で造ったロケットで。

でも、どうして彼らはそんなことをしようと思ったのだろう。

ロケット団代表　鈴木氏の原体験は、先述の「CAMUIロケット」開発者の一人、植松努氏の講演を聴いたことだった。「町工場のおやじだって、がんばったらロケットが造れる！宇宙開発できるんだ！だから君たちも『どうせ無理』って言っちゃいけない。」このメッセージに衝撃を受け、夢を持って成長している子ども達を前に、夢をあきらめてきた彼は奮い立たされたという。以来、「どうせ無理」をなくすには、まず大人ががんばらねば！と自分に言い聞かせ、彼自身ロマンを追いかけながら、子ども達にあきらめないことの可能性を教えている。

「普通の人ならあきらめそうなところで、あきらめない人のことを偉人という」と誰かが言っていた。もっともっとまちに「偉人」が増えれば、きっと「どうせ無理」をなくしていけると私は思う。それも遠くで大きな偉業を成し遂げた人ではなくて、手の届くところにいる「偉」大なる凡「人」が。その人が特別だからじゃなくて、あきらめなかったから成し遂げられたのだと気づくために。

私もかつて鈴木氏が植松氏の言葉に感化されたように、彼らの姿に感化されて、あきらめないことの頼もしさを実感したくなった。一つでもいいから、言い訳を廃して何かやりきってみよう。そして「あきらめるな」と言える大人になりたい。私も誰かにとっての植松氏になれるように。

NPO法人 空とロケット団(※法人申請中)
（http://kyoritusangyo.co.jp/jp/rocket/）
ロケット教室などを通じて、子供たちにあきらめないことの大切さを伝えながら、「市民活動初！目指せ1,000メートルプロジェクト」を進行中。

「あきらめなければ誰でも宇宙だって目指せるんだ。」
あきらめない大人（偉大なる凡人）が増えれば、子ども達から
「どうせ無理」はきっとなくすことができる。

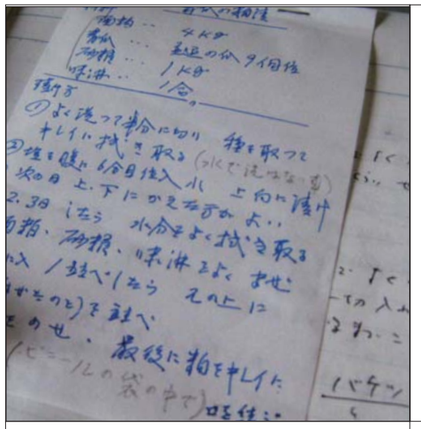
まちのミカタ
Litaracy
2012.7 vol.58

発行・編集
特定非営利活動法人　岡崎まち育てセンター・りた
〒444-0059 岡崎市康生通西4丁目71番地
岡崎市図書館交流プラザ2階市民活動センター内
TEL (0564)23-2888／FAX (0564)23-2898
http://www.okazaki-lita.com／http://www.facebook.com/okazaki.lita

配 布
岡崎市図書館交流プラザ・Libra／岡崎市内の地域交流センター
会員宛へ郵送　等　※会員登録をご希望の方は左記までご連絡ください。

配布協力
Ragslow／亜cha:la／F.it／森の花畑／FMおかざき／
杉くんの駄菓子屋／FURAgallery／angelshare／
長誉館／cafeくらがり／隠れ家

ID_000058



02 凸+凹=口

「コペルニク(http://kopernik.info/ja)」では、技術者と、寄付者と、困っている人たちの三者をつないで、世界中のさまざまな課題に解決を提供している。「つなぐ」だけで、こんなに可能性が広がるのなら、私たちが日常で何気なくやっている誰かへの「情報の提供」って、結構ダイナミックな行為かもしれない。

(F)

01 祭りの神髄

能見神明宮大祭2日目は、神明宮の御神体が各町を廻る荘厳な大行列「御神輿渡御」に始まり、日暮の山車宮入でクライマックスを迎える。ずらりと勢揃いした山車の提灯に灯がともると、一輛ずつ神明橋の辺りを出発し、老若男女が掛け声を合わせて山車を曳き、松本町など各町を廻り、バス通りに出る。それまでの和気藹々とした雰囲気は、バス通りを曲がり馬場先から神明さんの鳥居に向かう道に入ったところで一変する。

松本町の山車の大きさは鳥居の幅と貫の高さぎりぎりだ(そのうえ「松本町」と松が彫られた屋根上部の棟飾りをはずさなければくぐれない)。それを威風堂々と旋回させ、いかに粋に鳥居をくぐるか―。山車の前方には舵取り用の棒が出ており、「舵方」がそれを傾けることで車輪の方向を変える。舵方には山車の屋根が鳥居にあたるかどうかは見えない。視線の先にあるのは前方で操舵を指示する「山車(だし)進行」の拍子木のみだ。舵方が、小刻みに左右に振られる拍子木を凝視し舵を切るさまに、思わず息を飲んだ。

鬼気迫る表情というのは、これを言うのだと思った。「祭りの神髄」を垣間見た思いだった。

ここ何年か、見物客として神明宮大祭に足を運んでいた。しかし、初めて松本町の法被に袖を通し山車を曳く手綱を握らせてもらった今回(僕が見たのは祭りのほんの一部に過ぎなかったのだが)、祭りの一場面ごとに、町の先輩方、遡れば何百年もの間先祖代々受け継がれてきた伝統の重さが宿っていることを目の当たりにした。

法被を粋に着こなし要所要所で的確な指示を出す年行司と山車行司。紋付袴で行列を先導する総代と代表年行司。高張提灯の動きと連動し、拍子木を打ち鳴らし、曳き手に合図を送る山車進行。掛け声一閃、山車から舞台を引き出し、仕舞う若い衆。子どもたちは山車に乗ってお囃子を奏で、辻々で舞を披露し、与えられた重責を果たす。町が一体となって祭りを営む中で、掛け値なしにかっこいい大人たちの姿を肌で感じる。――大人の背中を見て子どもが育つ。まちに最も必要な「装置」がこの祭りには凝縮されている。

現在、松本町で動き始めている「松應寺横丁にぎわいプロジェクト」の原動力は、この祭りで培われた結束力にある。

(A)

03 青瓜の粕漬と「伝統」

自分は料理が苦手である。生来の不器用さと不精な性分が重なり、台所に立つことは滅多にない。しかし、梅雨も明けようとするこの時期になると、「今年もそろそろ作るかな」と重い腰を上げさせる料理がある。それが青瓜の粕漬である。

青瓜の粕漬は、祖母のところでよく食べた。粕に残るアルコールなど皆無なはずなのに、子どもの頃は咽(むせ)かえりながら、「大人の味」を味わっていた。祖母が亡くなり、今手元に残るのは、祖母が書き遺してくれたレシピと、当時それを熱心に書きとめた私のメモである。今年もそれを見ながら、祖母の面影と一緒に粕漬をつくることになるだろう。

私がつくる粕漬は、祖母の味とはどこか違うし、お世辞にも味は微妙だ。それでも、好きだった祖母のこと、当時の家族のことを何となく思い出せるから作るのである。

これは傍から見ると、「私は伝統を受け継いでいる」ということになるのだろうか。だとするとまちづくりにおいても、「伝統は守るべきだから守る」のではなく、「当時のことが好きだから受け継ぐ」となるのが理想だろう。伝統とは、当時生きた人々の「生きた証」を今の私たちが認めていくことに他ならず、次代の人たちに今の自分たちの生き方を認めてもらう過程であると思う。

(K)

まちとは、その通りを歩いている
１人の少年が、彼がいつの日か
なりたいと思うものを感じ取れる
場所でなくてはならない

Louis Kahn

まちに
記憶を遺す

Takahiro Yamada

(Y)

Text:Takahiro (Y)amada／Yutaka (A)mano／(K)enshi Fukada／Sayoko (F)ukaya